

10 長野県須坂市における古民家再生プロジェクトに関する研究 (2014年度)

井上 揺子
建築デザイン研究室

佐藤百合子
染織研究室

牧野 昇
造形文化研究室

高橋正樹
インテリアデザイン研究室

渡邊裕子
建築デザイン研究室

伊藤丙雄
東京工科大学

古民家プロジェクトが始まって5年目、都会と田舎を体験して未来のあるべき暮らしを見いだすという当初の目的をまっしぐらに活動してきたが、そのために必要な古民家の改修は、合宿の回数や資金状況に阻まれてなかなか思うように進まない。それでも3年目の2012年に1階座敷の畳を払い杉縁甲板に張り替えた時には、床に寝転がって杉の香りや風合いを全身に受け、大いに達成感を感じた。それから2年たち、いよいよ2階の納屋を宿泊室に改修する作業に踏み切る事になった。本来日本の建築は風通しが命であり気密性が低いから、人が歩けば2階の埃が1階へ舞い落ちる。納屋の階下は台所だが、宿泊人数に対応するためには隣の旧厩へ台所を拡張する目論みがあり、その前に階上の納屋を整備して百何十年の埃を一扫しておきたい事情もある。というわけで、2階を掃除しながら床に杉板を張ることが、今年度の一大事業になった。

2年前の1階座敷の床張りとは違うのは、階段のない納屋へはしごを掛けて床板や道具を運ばなければならないのと、それから屋根裏部屋である納屋は必ずしも正確な矩形ではなく、壁の角度は様々、つまり難易度がアップすることになる。講師としていらっした大工さんは理論派で、指示された作業体制は理路整然としていた。納屋の部屋ごとにグループを2つに分け、さらにそれぞれ庭で床板を切る人と2階の現場で床板を張る人に分かれる。午前と午後で入れ代われれば両方の作業を体験できる。現場組が部屋のサイズを実測し、庭組が床板を鋸で切る。数枚できあがると納屋へ搬入する。長い板を移動するには皆の協力が欠かせない。持ち込まれた床板を1枚づつ3～4人で張る位置に仮置きし、壁におつかるときは切ったり、隙間が空くときは端材を埋め込んだりして部屋の形に合わせて行く。形が整えば床板の裏にボンドを塗り、再び位置を合わせて宛木をして金槌でたたいて一つ前の床板の溝に差し込み、等間隔に釘で止めて行く。床板に傷を付けないように釘締めという道具を使うのも、回数を重ねるごとに速やかにできるようになる。2日間で床張りが完成すると、杉板の柔らかい表情のせいなのか、小さな窓から入る

陽の光のせいなのか、納屋は神聖な空間に生まれ変わった。後は所々にある朽ちた壁穴を埋めれば、この場所にも寝泊まりができ、合宿の参加人数を増やす事が可能だ。

まとめ

日本の建築材料として代表的な無垢の木材を張る体験は、必ず心の隅に残り、将来花開くことであろう。台所の拡張を終えるにはまだ時間がかかるが、地元の食材一須坂はそば、おやき、ひんのべはもちろん、果物大国であるのだが—をテーマに地元の方々とワークショップを繰り広げる準備も着々と進んでいる。これから行う春合宿では生涯学習活動の方におやきの作り方を伝授いただき、オリジナルおやきを考案するつもりだ。



釘締めで釘を押さえ、金槌でたたく



床板の張り終わりは隙間なく納める



床板を切る箇所に印をつける



床板が張りあがった



床板を鋸で切る



梨もぎも楽しむ



昼食はお手製の割り竹に流し素麺